

## 発症から6ヶ月を経過した脳卒中患者における訪問リハビリサービスの効果

野本 正仁<sup>1)</sup> 石森 卓矢<sup>2)</sup> 風晴 俊之<sup>2)</sup> 美原 盤<sup>3)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院訪問看護ステーショングラチア  
リハビリテーション部門

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[目的]我々は、回復期リハビリテーション(リハ)病棟退院後に訪問リハを利用した脳卒中患者におけるADLの経時的変化を調査し、発症から6ヵ月以降は改善が難しいと報告した。しかし、訪問リハの役割には、ADLのみならずIADLなどの社会参加の促進があり、先行研究では発症から6ヶ月经過後のこれらの効果について詳細な報告がなされていない。今回、発症から6ヶ月以降に訪問リハを開始した脳卒中患者についてADL、IADL、生活範囲に対する訪問リハの介入効果を検討した。

[方法]2013年7月から訪問リハを開始し、2019年3月までに終了した脳卒中患者425名のうち、発症から6ヶ月经過後してから訪問リハを開始した脳卒中患者19名(男性9名、女性10名、年齢 $66.0 \pm 12.5$ 歳)を対象とした。対象の訪問リハ開始時と終了時の2時点でFunctional Independence Measure(FIM)、Frenchay Activities Index (FAI)、Life-Space Assessment(LSA)を評価し比較した。統計解析では、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いた。なお、本研究においては臨床で得たデータで構築されたデータベースを用いて後方視的に調査し、当法人倫理委員会の承認を受けた(受付番号097-05)。

[結果]FAIのみ改善を認めたが( $p < 0.05$ )、FIM、LSAは明らかな改善は認めなかった(FIM:  $p = 0.16$ 、LSA:  $p = 0.06$ )。

[考察]発症から6ヶ月を経過した脳卒中患者はADLの改善を認めなかったが、IADLは改善した。このことは発症から6ヶ月が経過した利用者に対する訪問リハの有用性を示すものである。IADLの獲得を促進することはその人らしい生活の再建、その後の介護予防等にも寄与する。訪問リハの介入の検討は、発症からの経過期間が考慮されるべきである。